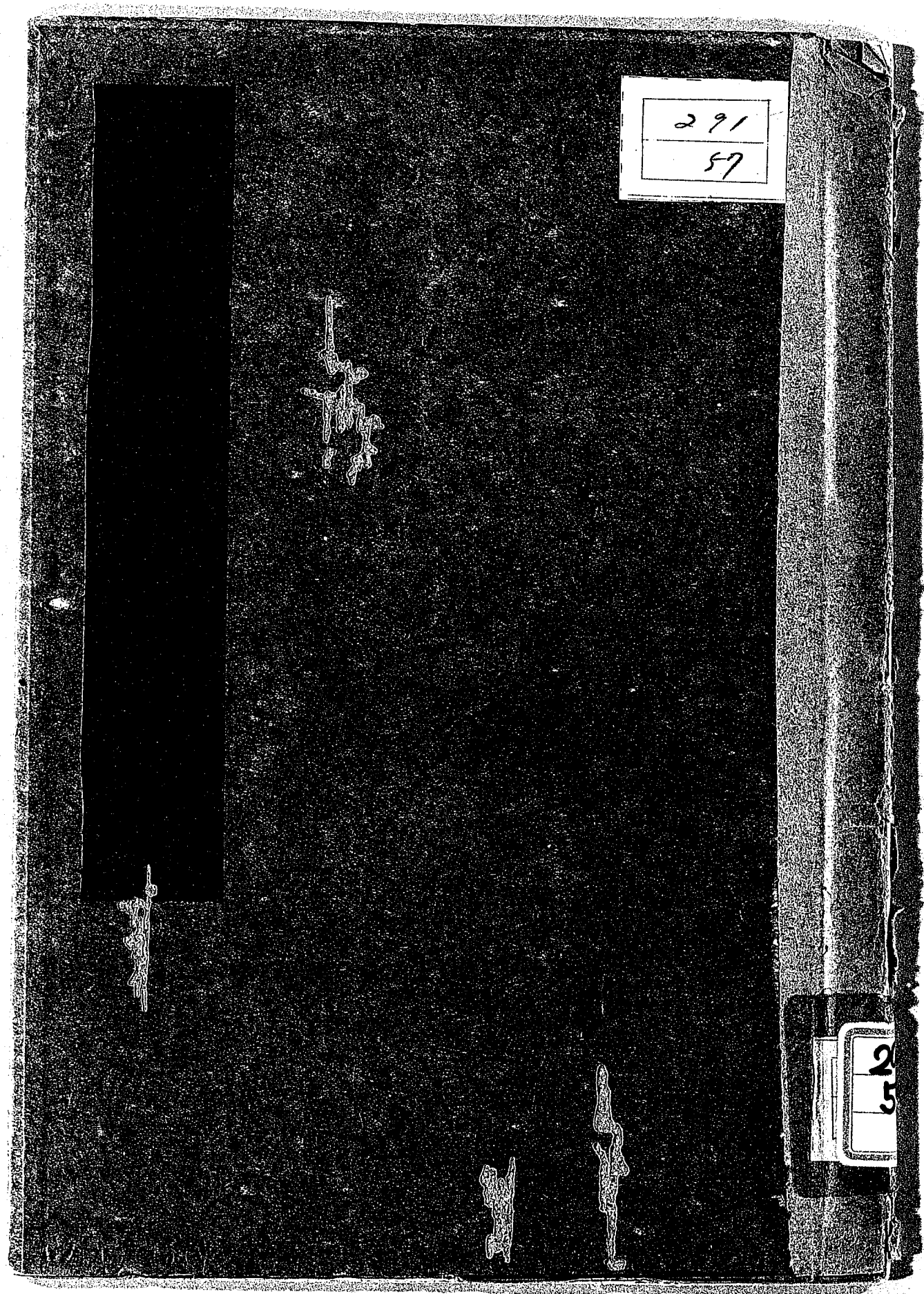




291
57

2
5

卷之三 熊野紀行

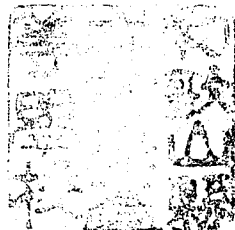
57

25

茶之熊手記行

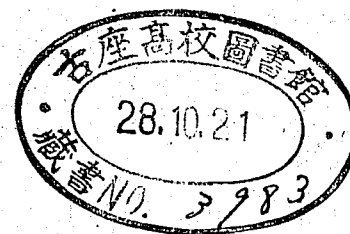


中根一郎氏寄贈



一口羊羹の特色 - 人体精力素の増進にウツ糖と砂糖代用糖 - 老幼虚弱者の元氣を増進す - 健康者の疲勞を恢復す - 高尚なる味は茶菓に尤も適す - 体裁優美衛生本意	一口羊羹の特色 - 人体精力素の増進にウツ糖と砂糖代用糖 - 老幼虚弱者の元氣を増進す - 健康者の疲勞を恢復す - 高尚なる味は茶菓に尤も適す - 体裁優美衛生本意	一口羊羹の特色 - 人体精力素の増進にウツ糖と砂糖代用糖 - 老幼虚弱者の元氣を増進す - 健康者の疲勞を恢復す - 高尚なる味は茶菓に尤も適す - 体裁優美衛生本意
山口屋 杉本謹製 山口屋 杉本謹製	山口屋 杉本謹製 山口屋 杉本謹製	山口屋 杉本謹製 山口屋 杉本謹製

281
57
1



熊野紀行

大僧正増基

何時はかりのことかありけり世を通じてもすあらんと思ふ
 世の中やとゆく所をわたりてさきまきなりといふやう、且は二箇
 所の様又事なり我が身の罪も少くはなさんとある人ありけり蓋
 とをいふけり神無月の十日はより熊野へ詣りける人々諸法を
 いふありけり我れもわが心もいふありけり我れもわが心もいふ
 子とてを言ひける事なり世つる日ハハ暫く言ひてとすや
 月面白くして初め指し気添へて世の事も思ふやうな
 の音遣かゆわき常の住家ならぬに思ふ夜の変更けり家
 れなり、はかばかしく思ひて又寝ふまゝなりと思ふ
 二にわかれ出てけり石居水神のころとて思ふにけり

其より二とに平日の夕暮、恒を不随てつやみ、見れぬ途か
ある海王に面白し、南には流石、木舟のさきありあり
遊ぶ、海人の歌もあらん、葦垣の屋のいとやさしきあり、秋
の名残夕暮の空の気色も怪知らすいと哀れなり、市社
には老い見えす、色こそあらず、紅葉散りて冬を催り
たり、怪を随ふ夢にて人を知らすかと思ふ

とやがけ一の玉のほの神さふけ
おのゝあふ

かし社を不傳らるゝ所し申すや、若の世は安んずるあり、
 木の陰を安んずるは、新の世の安んずるは、行末の世
 授をとりんと思ふ傳子、心深うし世を厭ふと思ふ安んず
 るらんかよりあり、若ははるばる安んずる、秋は紅葉を
 見ると、白く紅葉をみれば、心をつくし、秋の夕の月

見るも世間のとかちとを教へ給へ、

世の中を厭ふ業をん淫にた、淫の江みある程たまん
和泉守信太の歳をあるやうある

我か思ふことにはふたはふたも信すのよりうたふよかは
 紀の国吹上の浪とよめる月に見えぬの言は文人常か
 降りて遊ぶと言傳へたる所なり、いまお祈いと面白、今
 雪のふくにはさうおけれなり、夜は更けゆくも、鴨の上
 毛の雪ふち拂ふ金も空さふらうて、鶴の逢かお友呼ぶ考
 へ更お言ふべきかたゝまの哀れなり、其おらぬさあくの鳥と
 最も多し深し群れを呼ぶふかきより哀れなること限
 りか

乙女が、あま利衣をきつて、
くしあける、海子、おらん

月、海の面を宿るを浪の頻りあらわしむ

月、波をたふし又あきやふなる海、人の心は
はらひおくれをすし、又

浪、あれかるよきあらはこそ、身をたふし、人の心は

浪、あきやふなる海、人の心は、浪のあきやふなる海

又、あきやふなる海、人の心は、浪のあきやふなる海

海、あきやふなる海、人の心は、浪のあきやふなる海

ふかれん、あきやふなる海、人の心は、浪のあきやふなる海

石代、あきやふなる海、人の心は、浪のあきやふなる海

石代、あきやふなる海、人の心は、浪のあきやふなる海

千代の海、あきやふなる海、人の心は、浪のあきやふなる海

おつ、あきやふなる海、人の心は、浪のあきやふなる海

み、あきやふなる海、人の心は、浪のあきやふなる海

み、あきやふなる海、人の心は、浪のあきやふなる海

み、あきやふなる海、人の心は、浪のあきやふなる海

み、あきやふなる海、人の心は、浪のあきやふなる海

み、あきやふなる海、人の心は、浪のあきやふなる海

み、あきやふなる海、人の心は、浪のあきやふなる海

み、あきやふなる海、人の心は、浪のあきやふなる海

み、あきやふなる海、人の心は、浪のあきやふなる海

み、あきやふなる海、人の心は、浪のあきやふなる海

み、あきやふなる海、人の心は、浪のあきやふなる海

み、あきやふなる海、人の心は、浪のあきやふなる海

み、あきやふなる海、人の心は、浪のあきやふなる海

おとまりにちかふ、やうはあまるとは、あまをおさる御の
とふふれは、あまをいしや、後海の山おれをいしとちかふ、
のあまの海おとすりぬ、おの下おれおれ、あま作りて入
り臥しなるま、あま更なるま、あま作りて入るま
いふくあはしきあま作りて入るま、あま作りて入るま
あま作りて入るま、あま作りて入るま、あま作りて入るま
あま作りて入るま、あま作りて入るま、あま作りて入るま

あま作りて入るま、あま作りて入るま、あま作りて入るま
あま作りて入るま、あま作りて入るま、あま作りて入るま
あま作りて入るま、あま作りて入るま、あま作りて入るま
あま作りて入るま、あま作りて入るま、あま作りて入るま
あま作りて入るま、あま作りて入るま、あま作りて入るま
あま作りて入るま、あま作りて入るま、あま作りて入るま

あま作りて入るま、あま作りて入るま、あま作りて入るま
あま作りて入るま、あま作りて入るま、あま作りて入るま
あま作りて入るま、あま作りて入るま、あま作りて入るま
あま作りて入るま、あま作りて入るま、あま作りて入るま
あま作りて入るま、あま作りて入るま、あま作りて入るま
あま作りて入るま、あま作りて入るま、あま作りて入るま

又年次二部がしるべきことを悔し

玉の傍にほふはのくらにぞとけり又過下つるが

さし傳らふ程に、四月二りの夜、雨の降るをいふ

川のつらき道に、人ぞいふまゝに伝へ、神もいふまゝに

いふまゝに伝へ、頭白き鶴あり

山鶴が、いと白き鶴あり、年か増え、きけや来ぬらん

さき人の言を行きたれ、鶴の本と人の言、かへりはたぬ

くをとりて見れば、言のまゝの山にほだ板敷ありはたぬ

申すに、たき草をらんたきまゝにまゐ、さき所、再訪と

所

山の言をきき、さき所、再訪と

多田の山の跡のしるし

名ふるは、さき所、再訪と

山の言をきき、さき所、再訪と

目撃こそし、神のしるし

言のまゝに伝へ、頭白き鶴あり

山の言をきき、さき所、再訪と

山の言をきき、さき所、再訪と

山の言をきき、さき所、再訪と

山の言をきき、さき所、再訪と

山の言をきき、さき所、再訪と

山の言をきき、さき所、再訪と

下り神の山と見ゆ

山にこそたつたあなを待たね、秋の名残を久しかりけり

約日ふきまて一年くわー

いさあ、あまの孫のころあてわきまのきまのころあけり
又人の下へ住まへし事を思ふ

天竺人にもほが接つて、神のまじりのちうをな、お拂ふらん
四十九度のきまのころあてわきまのきまのころあけり、
吹けり

隣村の我がきまのころあてわきまのきまのころあけり、
梅かきりいふ所あり、又の孫のころあてわきまのきまのころあけり、
梅とつにたる

うはふ、あまの孫のころあてわきまのきまのころあけり、
梅かきりいふ所あり、又の孫のころあてわきまのきまのころあけり、
梅とつにたる

自の明けかけれ

祖をこめて、あまの孫のころあてわきまのきまのころあけり、

途次、神のまじりのちうをな、お拂ふらん、
あまの孫のころあてわきまのきまのころあけり、
梅とつにたる

あまの孫のころあてわきまのきまのころあけり、

あまの孫のころあてわきまのきまのころあけり、
梅とつにたる

あまの孫のころあてわきまのきまのころあけり、
梅とつにたる

この能行文の信常寺因文の信に記し又案より所記甘き
なり同寺解題中の増基法師の御記に次也

(内若古寺より寺刊新水記)

増基の京新寺相院の法主より同白蓮宗の子、世に如法
親王の位を降す元亨四年四月寺長史に任ぜられ花
園後醍醐天皇の御代に後醍醐天皇の御代に
と号し大僧に上り又元亨七年七月廿二日卒す

出典五等 四日寺より寺刊新水記より

中根文庫

謹告

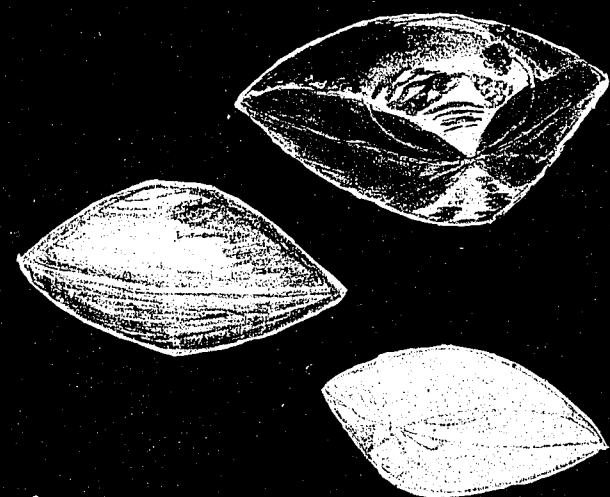
本品は新案特許第三八四三〇號を得たる弊社獨特の包装及び原料を精選せる製品にして四季變味のおそれなく他品の追従を許さぬ絶對保證品なり。御購求の際は本舗製品に御指定を乞

杉本製菓所

名物
一口羊

餡たん子

大丸



謹告

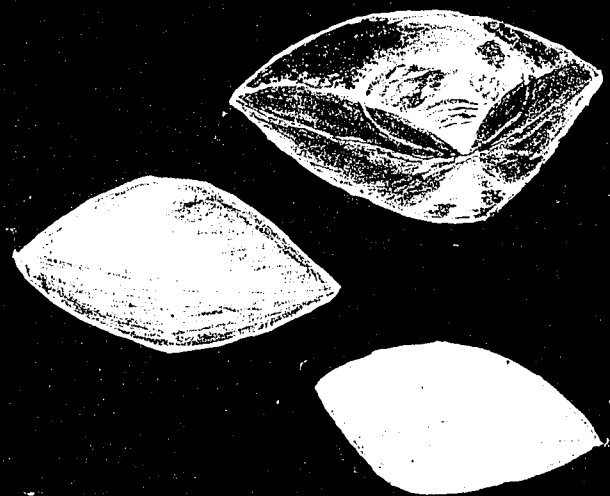
本品は新案特許第三八四三〇號を得たる弊社獨特の包裝及び原料を精選せる製品にして四季變味のおそれなく他品の追従を許さぬ絶對保證品なり。御購求の際は本舖製品に御指定を乞

杉本製菓所

名物
一口羊羹

餡たん

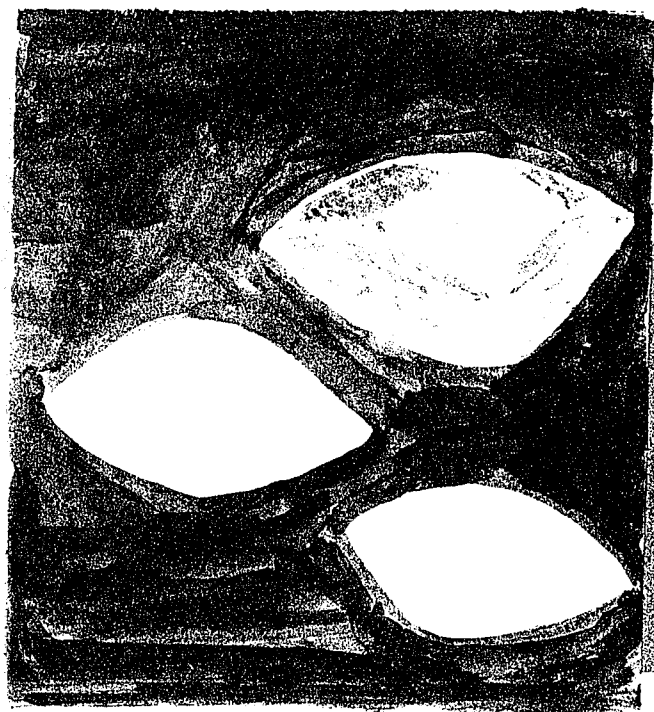
大丸

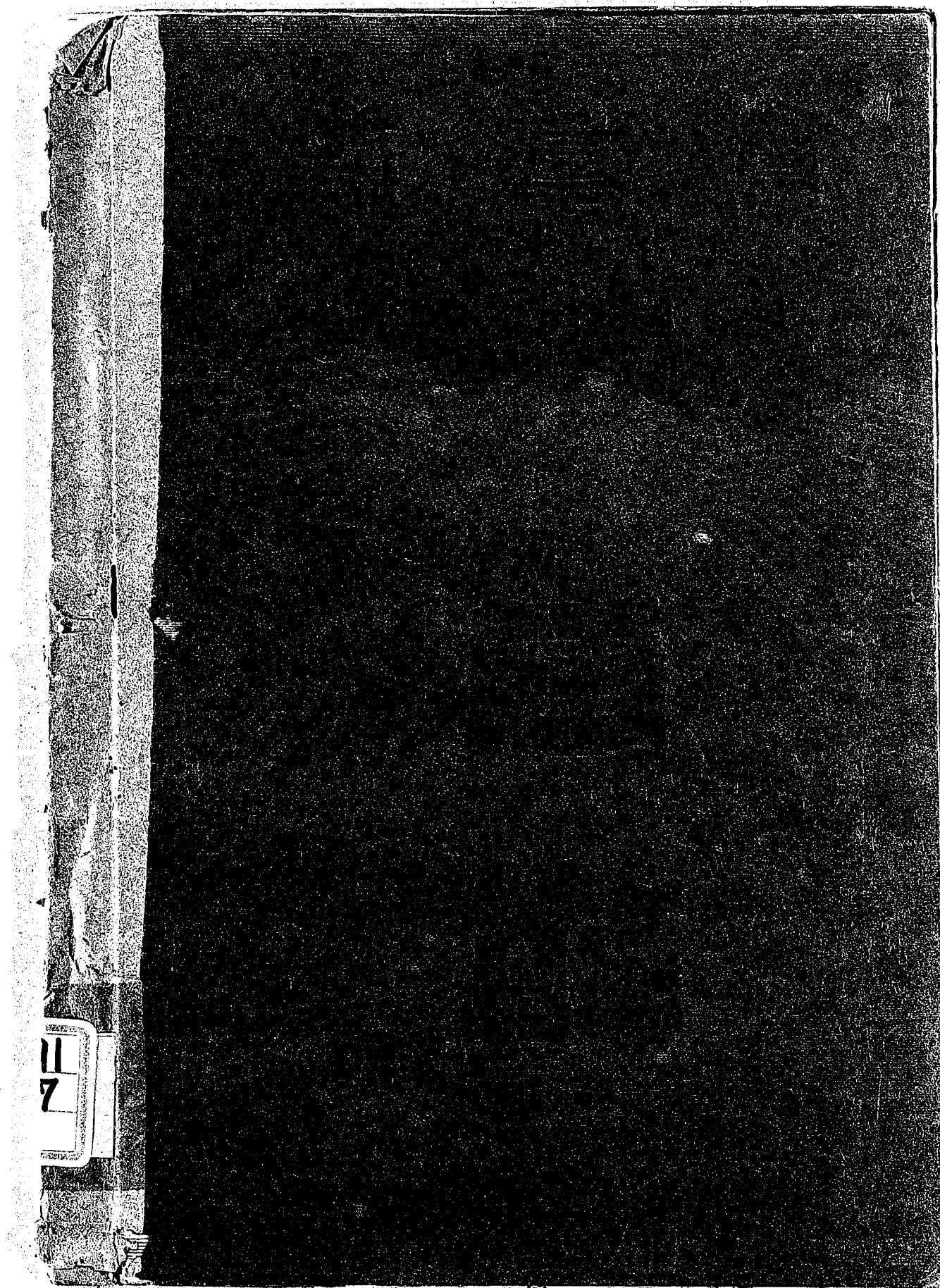


十美

餚たふ

大丸食料品部





11
7